

芭蕉俳句・良寛俳句に関する小さな発見

——加藤二郎先生に捧ぐ——

復まが 本もと 一いち 郎ろう

目下のところ、最初の俳諧撰集とされている明応八年（一四九九）の序のある『竹馬狂吟集』にしても、それに続く宗鑑編の『犬筑波集』にしても、「発句」の部があり、発句が単独で収められている。このことは、発句が、必ずしも俳諧の連歌（いわゆる連句）の第一番目の句として詠よまれるのみならず、発句そのものとして、今日の俳句のごとく、単独で詠よまれ、また、享受されていることの証左となる。もつとも、発句が単独で詠まれ、享受されていたのは、俳諧に限らず、その源流である連歌においても発句帳があることから明らかである。俳諧もまた、連歌で試みられていたことを、そのまま踏襲したということなのである。今日、俳句と呼ばれ、隆盛を極めている「五・七・五」の文芸形態は、発生の当初から、そのようなかたちとして存在していたのである。ところが、『竹馬狂吟集』にしても『犬筑波集』にしても、発句に作者名が記されていない。俳諧の発生当初、人々は（作者も、享受者も）、もっぱら、その哄笑性に

のみ関心があり、作品のパテントということに、ほとんど関心がなかったのであろう。哄笑を誘まようものとしての共有の作品ということである。しかも、「五・七・五」という詩形は（あるいは、「五・七・五／七・七」七／五・七・五」という付合の形であっても）記憶しやすいので、いきおい、口誦文芸としての色彩を色濃く帯びていたのであろう。いわゆる「言捨て」としての俳諧である。

が、江戸期の最初の俳諧撰集である重頼編、寛永十年（一六三三）刊の『犬子集』には、ほとんどの作品に作者名が付されている。作者は、哄笑のパテントということを強く意識しはじめたのであろうし、享受者（読者）もまた、哄笑のオリジナリティーというものを大切にしなければならぬのであろう。

*

芭蕉が寛文七年（一六六七）、二十四歳の時に作った発句に、

萩の声こや秋風の口うつし

という作品がある。恩師中村俊定先生校訂になる岩波文庫中の『芭蕉俳句集』では、二十八番目に掲げられている。今日、知り得る芭蕉発句で、この作品と同時期までに作られたと推定されている作品は、四十句に満たないので、芭蕉のごくごく初学の時の作品として貴重である。この作品を収録しているのは、芭蕉の師北村季吟の息北村湖春編、寛文七年（一六六七）十月刊の俳諧撰集『続山の井』である。

同書の「秋之発句」の「萩」の題の下の七句中の一句である。今、参考までに、七句総てを掲げてみる。

萩

夏のうちは無言か秋の萩の声 意朔

花はいつ風に実のいる萩の声 一六

萩の声こや秋風の口うつし 宗房

秋風の口ざみせんか萩のこゑ 越後高田 為甲

こそつくと萩原をくる秋の声 遠州浜松 幸正

秋くとは是かそよ／＼萩の音 備前 生房

風の神の事ぶれなれや萩の声 之也

言うまでもなく、宗房が、当時の芭蕉の俳号である。

芭蕉登場以前の発句は、すべて右のごとく、例外なく、題詠作品であった。対象の存在とは関係なく、「萩」なら、「萩」の題の下で、知的観念的な句作に精を出して

哄笑性を競うのである。後年、芭蕉が「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」（土芳『三冊子』）と唱えて、対象を凝視し、そこから受ける感動を形象化しようとした、後代の子規の「写生」説の先駆とも言えるような姿勢は、俳諧文芸の質においてユベルニクスの転回を齎したものである。それはともかく、題詠下での知的観念的操作による哄笑性を目指しての句作ゆえ、オリジナリティーを志向しながらも、いきおい作品が類型化してくるようになる。右の「萩」七句にもそのことが窺える。とくに、宗房と為甲の句など、よく似ている。

右の句を離れるならば、これも『続山の井』に収録されている芭蕉句へ夕兒ゆふがらにみとるゝや身もうかりひよん（宗臣編、延宝七年序『詞林金玉集』では、へ夕兒の花に心やうかりひよん）の句形で芭蕉句として収録）が、胤及編、万治二年（一六五九）刊『匏屑集』には、へ夕顔の花にこゝろやうかれひよん）の句形で俊之の作として出ており、同じく『続山の井』中の芭蕉句へ降音ふりおとや耳もすふ成梅なるの雨）が、顕成編、万治三年（一六六〇）刊『境海草』には、へ音聞や耳もすふなる梅の雨）の句形で玄良の作で出ていることが、すでに、先学によって指摘されている。哄笑性のオリジナリティー、パテントを競いながらも、それが哄笑性のみを目指したがために、踟躕ちとぎを免れ得ず、かかる混乱を生むことになってしまっ

たのであろう。

この「夕兒」(『詞林金玉集』の「夕兒」の句形は、伝承の過程での混乱か)の句にしても、(降音や)の句にしても、先行の俊之句「夕顔」に、玄良句「音聞や」に発想(趣向)が酷似していながらも、その句形のいささかの相違ということで、辛うじて、今日、芭蕉句として認められているものであるが、今、私が注目している、

荻の声こや秋風の口うつし

の場合は、いかなるものであろうか。今、私は、一つの報告をしようと思っている。それは、芭蕉のこの作品以前に、この作品と酷似した作品が存在していたということなのである。

その作品が見える俳諧撰集は、良徳編、慶安四年(一六五一)刊の『崑山集』。同書の「秋之第二」の「荻」の句十三句中の一句として、

荻のこゑや秋吹かぜの口うつし 大坂藩本七郎右衛門 盛庸

が見えるのである。ここで、問題の芭蕉句と並べてみよう。

荻のこゑや秋吹かぜの口うつし 盛庸

荻の声こや秋風の口うつし 宗房

ということになる。盛庸の句が公表されたのが、右に記した通り、慶安四年(一六五一)、芭蕉の句が公表され

たのが、先に記したように、遅れて、寛文七年(一六六七)のことである。従来、両者の類似性の指摘は成されていない。

盛庸は、今榮藏氏の『貞門談林俳人大観』(中央大学出版部、一九八九年二月刊)によれば、『崑山集』、二十三句入集作者。句形に多少の相違はあるものの、荻の葉音を秋風の「口うつし」(口伝え、口授)と把握したところ有一句の眼目があり(季吟の正保五年刊『山の井』に「荻は風にこたへて声のあなれば、秋風の口まね、定宿などいひ」と見え、このあたりからの発想であろう)、そうであると、オリジナリティーは、盛庸句にあらう。となると、今日の等類観(類句観)から言えば(後年の芭蕉の等類観から言っても)、当然、芭蕉句は、盛庸句と類想ということになり、芭蕉句とは認めがたいということになってくるのであるが、今は、報告のみしておくことにする。ただ、芭蕉のために少し弁護しておくならば、後年、「句調はずんば、舌頭に千転せよ」(『去来抄』)と唱えた芭蕉にふさわしく、リズムは、芭蕉句のほうが、はるかにいい。

また、稿本、延宝七年(一六七九)自序の桑折宗臣編の一大アンリロジー(引用俳書九十七冊)『詞林金玉集』においては、編者宗臣は、『崑山集』にも目を通し、同書からも採取しながらも、「秋部」の「荻」四十四句中

の一句として、『続山井』からとして、

荻の声こや秋風の口うつし

桃青

伊州上野
松尾氏家房

と、芭蕉句の方を採取している。宗臣は、作品としてすぐれているということで、芭蕉句を採り、先行する盛庸句を捨てたのであろうか。なお、宗臣は、『毛吹草』から、望一の〈秋風の口まねするや荻の声〉をも、採取している。

ちなみに、芭蕉発句の古注釈書関係の中で、この〈荻の声〉を採り上げているのは、亦夢著、天保元年（一八三〇）序の『俳諧一串抄』のみである。

*

江戸後期の歌僧良寛の父が、俳人橋以南いなであることは、一般にはあまり知られていないことであるかもしれない。美濃派の俳人北溟門であり、同時代の暁台や士朗等とも交流があった。俳諧撰集『天貞伝』は、以南が、京の桂川に身を投じて没したことを悼んで丈雲によって編まれた七回忌追善集で、享和元年（一八〇一）の跋が見える。『天貞伝』は、佐藤吉太郎著『良寛の父橋以南』（第一書房、昭和十年八月刊。のち、昭和五十六年五月、出雲崎史談会より復刊）に、影印で収められている。

以南のことはともかく、良寛も、また、百に近い俳句作品を残している。その中の一句、

うらを見せおもてを見せてちるもみぢ

は、良寛の辞世として喧伝され、愛誦されている。定家研究の第一人者石田吉貞先生も、その著『良寛―その全貌と原像―』（塙書房、一九七五年十二月刊）において、とくに辞世の句ともいべき、

うらを見せおもてを見せてちるもみぢ

を読むと、消えゆくとする薄明の意識のなかに、生死一如の禅の真意が明らかに感じられていたことが思われ、その貴き円寂に、合掌をささげたい気さえするのである。

と記されている。が、石田吉貞先生も注意深く「辞世の句ともいべき」と記されているように、この句、良寛の作ではない。

良寛の晩年の恋人ともいべき弟子の貞心尼あが編んだ、天保六年（一八三五）序の『蓮の露』の中に、

かゝれば、ひる夜、御かたはらに有て、御ありさま見奉りぬるに、ただ日にそへてよはりによはりゆき給ひぬれば、いかにせん、とてもかくてもとをからずかくれさせ給ふらめと思ふにいとかなしくて、

貞

いきしにのさかひはなれてすむみにもさらぬわか
れのあるぞかなしき

御かへし、

うらを見せおもてを見せてちるもみぢ

師

こは、御みづからのにはあらねど、時にとりあひ、
のたまふ、いとくたふとし。

と見える。良寛は、天保二年（一八三一）正月六日、七
十四歳で没している。右の良寛と貞心尼との酬和が行わ
れたのは、天保元年十二月末。とすれば、石田吉貞先生
が言われるように、「辞世の句ともいふべき」作品であ
ることは間違いない。貞心尼が肉体の滅亡を悲しむのに
対して、良寛は、末期の中で、自らを「ちるもみぢ」に
託して、「生死一如」であることを、貞心尼に示したも
のであろうか。

このへうらを見せの句が良寛の作品でないことは、
記録者の貞心尼が「御みづからのにはあらねど」と記し
ているところからも明らかである。

良寛の俳句を集成した便利な本に、川口霽亭の『良寛
の俳句』（湯川書房、一九七七年四月刊）がある。その
中で、霽亭は、「次の十二句は、良寛作として流布して
いるものであるが、出典でも明らかのように良寛の作品
ではない」として、十二句掲げており、その中に、この
へうらを見せの句も含まれているのであるが、それで
は、具体的に、良寛の心を捉えたこの句が、先人の誰の
作品であるかは、明らかにされていない。先行する諸書
も、不問に付している。

ところが、このへうらを見せの作者が見付かったの

である。その報告である。

良寛の頭の中にあつた作品は、蕉門木因の、

裏ちりつ表を散つ紅葉かな

の一句であつたと思われる。初出は、森川昭氏編『谷木
因全集』（和泉書院、昭和五十七年十月刊）によれば、
乙孝編、元禄十三年（一七〇〇）刊『一幅半』である。

「冬の部」に収められている。安永三年（一七七四）刊、
蝶夢編の『類題発句集』にも、「紅葉」の項に、

うら散つ表をちりつ紅葉哉

の用字で収録されている。他には、右の句を基としての、

うら散つ表をちりつ秋紅葉

の句形が宝永二年（一七〇五）に、木因が、美濃国高須
の行基寺に詣でた折に作られている。木因が没したのは、
享保十年（一七二五）であるので（享年八十）、木因の
へ裏ちりつは、辞世とは関係ない。純粹の叙景句であ
る。

良寛は、俳諧にも関心があり、生家山本家には、俳書
を中心とする「橘屋藏書目録」が伝存していたことから
も類推し得るように、良寛が、『一幅半』、あるいは『類
題発句集』を披見していた可能性は、すこぶる大である。

良寛の愛誦句であつた木因のへ裏ちりつ表を散つ紅葉
かなは、いつの頃からか、良寛流にへうらを見せおも
てを見せてちるもみぢと、アレンジされたのであろう。

歌人であるだけに、良寛流にアレンジされた作品のほうが「調べ」が、はるかによい。オリジナルである木因句が話題にのぼらず、良寛アレンジ句へうらを見せおもてを見せてちるもみぢのみが喧伝されたゆえんであろう。

この句を、貞心尼が、良寛が病い篤いさなかにあって、わざわざ「御みづからにはあらねど」と断わっているのは、この折りに、良寛の口から種々説明が成されたものではあるまい。貞心尼が、良寛のもとをばじめて訪れたのは、文政十年（一八二七）のことと考えられている（文政九年説もある）。時に、良寛七十歳、貞心尼三十歳である。爾後、良寛が七十四歳で没する数年間の間に、良寛は、自らの愛誦句であるへうらを見せおもてを見せてちるもみぢについて、貞心尼に語るがあったたのであろう。それゆえ、末期の床で呟いたへうらを見せおもてを見せてちるもみぢに対して、貞心尼は、「御みづからのにはあらねど」との注を加えることが可能だったと思われるのである。

*

芭蕉と良寛という時代を大きく隔てた人物に関する小さな発見の報告をしてきたので、擲筆するに当たって、両者を関係付ける話題でしめくくることにしたい。

貞心尼は、『蓮の露』の巻末において、右のエピソードを伝えた後で、「口ずさみ給ふはつ句のおぼえたるを」

として、八句書き付けている。その中の一句が、新しいけやかはづとびこむ音もなしである。

いうまでもなく、この良寛句、芭蕉の、

古池や蛙かはとびこむ水のをと

を踏まえてのものである。芭蕉の代表句中の代表句へ古池やに、良寛も、また、大変興味深いことである。良寛一句を作っていること、大変興味深いことである。良寛句が、芭蕉句のパロディーとしての、へ新しいけやの句を通して読者に伝えたかったメッセージは、いったい何だったであろうか。「流行」のみを追い求めることに對する警鐘であろうか。良寛には、芭蕉のへ此道このや行人ゆくひとなしに秋の暮の句を踏まえてのへいざさらば我も返らんあきの暮の句もあるので、良寛が、芭蕉の俳諧世界、あるいは、精神世界に私淑していたことは間違いない。あるいは、五合庵に自ら作った生活用の池の無風流みずかの戯画化、すなわち、芭蕉の閑寂境に到達し得ない自らの精神生活の戯画化ということだったのであろうか。いずれにしても、芭蕉と良寛とを繋ぐパイプは、決して細くはないのである。

小稿を、平成七年（一九九五）三月をもって神奈川大学経営学部を御退任になられるドイツ文学者加藤二郎先生に捧げさせていただきます。経営学部創設時の平成元年以来、大学人としての学者、研究者のありかたというものを、身近にあつて、無言うちに、先生からお教えいただいたように思います。先生は、御自分の御研究のために、大学の諸行事を疎略にされるということは、決してなさらないかたでした。かといって、大学の諸行事の多忙であることを理由に、御自分の御研究を放棄するということも決してなさらないかたでした（大学には、多忙を理由に、研究生活を放棄してしまう人のなんと多いことか）。そして、この六年間の間にも、次々とすぐれた御研究の成果を世に問われました。先生は寡黙でいらっしゃるので、大好きな釣りのお話し以外に、御自分の御研究のことをお話しになることは、ほとんどなさいませんでした。私にまで間断なく恵与下さった御研究成果の数々は、専門を異にする私にとつても、大いに刺激的でありました。最近の先生は、必ずしも御健康に恵まれてはいらっしゃいませんでしたが、そんな中でも、御研究を中断されるということは、なかつたようにもお見受けしました。

勿論、拙宅へお出でいただいて、無礼講で大いに置酒

歓談させていただいたことや、先生のお宅にお招きいただいた、西洋料理のフルコースを、おいしいドイツワインとともに御馳走になったことなど、楽しい思い出も沢山あります。いつの場合でも、先生は、決して、自ら自己の存在を声高にアピールすることなど、一度もおおありではありませんでしたが、不思議な存在感と威厳と、なつかしさとがおりでありました。ですから、時に、体調を崩されて教授会、あるいは公のパーティなどを欠席なされると、私など、淋しくて仕方ありませんでした。私にとつて、先生は、大学人のありかたを存在そのものを通してお教え下さる大きな大きな先達でいらつしました。先生のような、本当の意味で静かに学問を愛されるかたの存在は、経営学部にとつて大変貴重でありました。それゆえ、御退任は、定年制によるものとはいへ、残念であり、私など、大いに不安でもあります。これからは、先生が無言のうちにお示し下さった大学人としての姿勢を、少しずつとも自らのものとしてゆくべく努力したいと思つぱかりであります。

末筆ながら、先生のますますの御加餐、御長寿をお祈りするばかりであります。

（平成六年十月十六日了）